

『嵐』と『花』と

青山敏貞



昭和15年2月、当時保土谷化学研究所に勤め、軍極秘の某課題に没頭して居た私は、恩師東大教授牧鋭夫博士を通じた突然の御要請により、その年の4月に第1回生が進学する日大工業化学科第2学年の『染料と中間物』の講義をお引受けする事になった。

さあそれからが大変、開講まで僅か二ヵ月、激務の暇を見付けては必死になって講義の骨子は整えたものの、大学本科での連続講義、若し遺漏が有っては新設学科の名に拘わると、細部を綿密に検討し始めたが間に合わず4月になってしまった。

私の受持ちは毎週土曜日の午前10時からの二時限、従って講義が始まってからは、毎週の金曜日は徹夜々々の一ヶ月だった。今でも、未熟な講義を聞かされた第1回生の諸君にはお詫びしたい気持ちで一杯だが、私も夢中で一年間頑張った。

やがて学年試験が近付いたので私は「当日は各自のノートは勿論、どんな参考書を持込んでも構わない。私の一年間の講義ノートを整理してある諸君には満点が取れる問題を出す」と宣言した。

今では夫々各方面の大家に成って居られる当時の学生諸君には失礼に当たるかも知れぬが、一年目の試験の模様を懐かしく思出させて戴く――。

当日、カンニングの番人ではない私は試験場で壇上の椅子に腰掛け、自分の専門の本を読んで居る内に規定二時間の半ばが過ぎた。もうその頃には二人、三人と答案を出す人があったが、室内が急にざわめいて来たので見渡すと、一齐にノートの本を開いて探して居る音だったのには驚いた。

更に吃驚したのは、これほど自由にして受けて貰った試験の答案を、私が予定した基準で採点して見ると、上は130点から下は30何点の人まで居た事だ。己むなく上の人30点を貰って配分し、格上げに苦心したが60点以下の人が未だ十数人残った。未経験だった私は

そのまま答案を事務室に提出したところ、「なんとか留年生を減らして欲しい」と頼まれ5、6名に絞った。すると忽ち、来学年の受講生は半減すると噂されたが翌年も大勢集まってくれた。その訳は、私が連続講義三回毎の最後の一時間はノートを離れ、私が研究室や工場で体験した失敗談、実験中の事故からの脱出法、教科書に書いてある方法の逆を行なって成功した話等をするのが講義より面白いとの評判が立ったからだと聞かされて些か恐縮したが、後年お会いした何人かの卒業生諸君から「あれが実際に役に立った」と感謝されたのは今でも嬉しい思い出である。

やっと馴れた私が二年目の講義を続けて居た昭和16年12月8日、日本は遂に米英両国に宣戦し、第二次世界戦争に卷込まれた。

そして翌昭和17年の4月18日、東京は米国陸軍ドゥーリトル(J・H・Doolittle)中佐の率いるB25爆撃機隊によって初空襲された。この日が亦、土曜日。講義を終わって神田の古本屋に居た私が駿河台校舎の屋上に駆け戻った時、荒川尾久方面の爆撃を終えた米機が頭上を掠めて行った。東京はもうこの時から戦場になって了ったのだ。

昭和18年度第三回生諸君の卒業研究実験は校外関係各社に分散して行なわれたが、私の研究室に来られたのは近藤保生君だった。

同君は前記の130点組の一人で、立派な卒論を完成し、9月に短縮卒業、保土谷化学への入社を予約して海軍を志願された。やがて少尉に任官、南方に向かわれたが、戦況は実に不利、任地に上陸の直前、敵潜水艦の雷撃に遇って戦没された。

出航間近の或る日、近藤君が私の自宅を訪ねて来られた。その日、白一色の凜々しい制服の背に、降る様に散る花片を受けつ、桜並木の道をさっ爽と去って行った同君の後姿が目には焼付いて居て、今でも家族一

同で御冥福を祈って居るが、実に惜しい人材を失った事が残念でならない。

想えば、わが日大工業化学科は正しく我が国建国以来の大嵐の前夜に誕生したのだ。私と一緒に勉強した第一～第四回生諸君は勿論、第十五回生位までの諸君は、或人は戦場で、多くの人は爆弾が雨と降る地獄と化した国内で、生命を賭けた毎日を過ごし、敗戦後は亦、廃虚同然の職場の再建に献身、文字通り嵐の中に生き、嵐を乗り越えて来られた筈だ。それ以後の諸君は、先輩諸氏と協力し、これまた懸命の努力によって、今や世界が羨む様な新日本国の建設に貢献され、そして又、わが工業化学科もここに華やかな開設50周年記念の日を迎えられた。誠に御同慶の至りである。

しかし、日本は今、外見上余りにも華やかな繁栄振りから世界各国嫉視の的に成って居る。この儘、自分勝手な道を進めば、折角皆で築いた「花」の時代は崩壊し、再び世界の孤児になって「嵐」の悲況に追込まれる事は必定である。

これからこそ、狂嵐に耐えて来た先輩と花園に育った後輩が力を併せて生抜く時代、正しく西条八十氏の歌詞通り「花も嵐も踏み越えて行くが男の生きる道」だと確信する。

諸君、一緒に『花』を守り、『嵐』を防ごう！

(1987.11.30記、元非常勤講師)

戦時の学生生活と学徒動員の回顧

伊藤和雄

5回生は、大東亜戦争の真ただ中に入学し、終戦と共に卒業した最も戦争の影響を受けた学生である。我々は予科時代の昭和16年10月に出された勅令により修業年限が6ヵ月短縮し、17年9月、世田谷の予科(3年制)および駿河台の予科理科(2年制)を繰上げ修了、専門部卒の2名と共に工学部工業化学科に進学した。学生数は約80名であった。

当時すでにミッドウェー海戦で大敗していたが(17年6月5～7日：真相は知らされていなかった)、戦線はまだ拡大方向にあり、軍・民とも戦意いまだにおとろえていなかった。一年の頃は、講義に午後の実験に、希望に燃えて熱心にとり組んだ。ときには近くの喫茶店「ササヤ」などで将来の夢を語る余裕もあった。休暇を利用しての工場実習も各人それぞれ実施した。18年と19年の春休みには教授が引率して、関西、東海あるいは新潟、富山の工場見学旅行を行なった。その帰途立寄った東山温泉で、明日からは廃業という芸者に花札で大負けして人質にされた武勇伝も残っている。18年秋、ほとんど全員が参加して日立の精錬所と電線工場を見学した。精錬所でオランダの捕虜が裸で働いていたのが印象にのこっている。高萩に一泊し、食料不足の東京へ乾燥芋、干魚などを土産にしたことを思い出す。その後物資は目に見えて不足し、特に食

糧・衣料は配給制で、食堂で米飯をたのめば外食券、旅行には米を持参せねば泊めてもらえなくなり、どこそこの雑炊食堂(外食券不要)何時から売ると聞けば、何をさておいても長蛇の列をつくって、今ではとても口に出来ないような「ぞうすい」をむさぼる様に食べた時代に移ってゆく。やがてそれすらも無くなるのである。

一方教練はきびしかった。富士の裾野や習志野の陸軍廠舎に数泊しての野外教練は、昼は演習、夜は南京虫ときつかったが、今思い出してみると楽しい。日大工学部の最後の配属将校は、ガダルカナル徹収のときの総後衛部隊長、陸軍大佐松田教寛であった。

出版は思想関係の図書の検閲がきびしくなり、発禁や伏字の本が多くなった。優遇されていた技術図書も、用紙の不足から一般図書同様に予約制となり、予約しても買えないことが多かった。もちろん紙も装幀も粗末きわまる戦時版であった。工業化学科創設以来続いていた「日大工業化学会・工化会報」も、紙の配給なく、ようやく見つけた京橋の印刷屋の手持ちの紙で、18年に出したのが最後になった

予科時代にはまだ学生服が揃っていたが次第にスフのぺらぺらものになり、登校にはゲートルを着用した。ゲートルを巻かずにきて(教練の)教官に見付かり始

末書を取られた者もいた。進学当時は真鍮の徽章であったが、これも金属不足からモールの刺繍による徽章を角帽に縫いつけるようになった。

昭和18年6月、「学徒戦時動員体制確立要綱」（本土防衛のため軍事訓練と勤労働員を徹底）が閣議決定された。ついで10月、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」が決定し、理工科系統および教員養成関係以外の学生の徴兵猶予が停止され、文科系大学の理科系への転換、勤労働員を年間1/3実施などと大変きびしくなった。10月21日、文部省・学校報国団本部により出陣する学徒壮行大会が神宮外苑競技場で挙行された。東京近在77校数万人の中の一員として、我々日大工学部2年生全員も雨の中に校旗を先頭に劇的な行進を行ない、東条英機首相（陸軍大将）の閲兵をうけた。

我々は理工系の故に一般の勤労働員には行かなかった。何年のときか忘れたが（あるいは予科の頃か？）、夏の暑いころ、空襲にそなえ警報発令前に連絡をうけると銃をかつぎ、隊列をくんで日比谷公園まで駆け足し、木陰の中に待機、警戒警報発令すれば日比谷交差点の交通整理をするための訓練をうけたこともある。

昭和19年1月、「緊急学徒勤労働員方策要綱」が決まり、3月には動員は通年実施と決定された。（中学上級以上の男女全員）我々も2年の学年試験を早々に終えて、軍需工場の技術者不足を補うため6月半ばから1年間動員されることになった。動員先は4ヵ所で、それぞれの概要を北から述べる。

北海道人造石油班〔北海道滝川〕15名

（大牟田および尼崎の人石と合併し、日本人造石油と改称）

6月10日17時30分、上野駅を出発し、16日入所式を行なった。北海道人造石油は京都大学の技術により建設が進められていて、児玉信次郎、常岡、村田などの諸先生が指導していた。学生は我々の外、東大から6名が来ていた。会社の社長は三宿海軍中將で戒律厳しかったが、技師補の待遇が与えられ大変優遇された。

工場はフィッシャー法による石油合成を目指していたがコバルト触媒や硝酸が払底していたので鉄触媒でやろうと、福島黄土を使った。それで反応温度、圧力が高くなり、配管などすべて高圧ものを使った。合成炉は二重管を単管式とした。石炭ガス化のコッパース炉は国内最大のもので脱硫、合成と非常に大規模な工場であった。

我々学生は、その中間試験と工業試験を担当し、19年6月下旬から準備に取り掛かったが、実際にテストに入ったのは20年2月の初めであった。触媒の還元か

ら始まり油が出るまでにひと月かかった。一酸化炭素には随分注意したが2回ほど中毒が出た。油が順調に出だしたときは大感激であった。作業は東大と競争の様になったが、日大の方が体力があつて徹夜がつづいても、我々の方が辛抱強くがんばった。この成果に対し軍需大臣から表彰された。表彰状には「日本人造石油株式会社 滝川事業所合成工場 日本大学学徒勤労働隊 右ハクク上下和親全員一体トナリ率先職務ニ勉勵シ一般ノ亀鑑タリ依テ茲ニ之ヲ表彰ス 昭和二十年三月二十一日 軍需大臣正三位勲三等吉田茂」とあった。副賞のブドー酒2ダースで大いに悪酔いし、雪の中にひっくり返ったことを思い出す。表彰のことは北海道新聞に大きく報道された。

北海道は内地とちがいで、じゃがいも、小豆、かぼちゃ、バター、鯨、ほっけなどと食物が豊富にあった。6月25日、動員解除され引き上げたが、かぼちゃの食いすぎで黄色になって帰ってきた。我々の努力にもかかわらず本工場からの石油は戦争に間に合わなかった。

三井化学目黒研究所班 21名（人数は推定、以下同じ）

三井化学は当時日本最大の総合化学会社で、その中央研究所である目黒研究所は部制をとり、無機、有機、染料、燃料、金属、選鉱などの部（呼称は1部、2部…）があり、学生は日大の外に東京工大、北大、早稲田からも来ていて各部に配属された。グループで一つのテーマを受け持つ者、研究員の助手をつとめる者、女子を指導して分析の主任的仕事を担当する者などと色々であったが、一流の研究所で研究室の雰囲気はひたひた、研究というものの一端にふれることが出来たことは幸いであった。

戦局があやしくなり、より緊急なものへテーマの変更もあったが、3月以降空襲の被害が大きくなるにつ



れてガスが出なくなり、停電しがちで実験は滞り、緊急疎開の家屋取り壊しにかりだされたりした。

こんな状況に危機感をいだいて自ら志願し、海軍横須賀工廠の指示により福島県錦の呉羽紡績（現呉羽化学錦工場）へ転進した者（2名）もいた。錦では電解水素を米本土爆撃用風船爆撃基地に送っていたが、偏西風の弱い夏は風船が揚がらず、水素は金属カルシウムとオートクレープで反応させ、水素化カルシウムにしていた。2名は石油缶入りのカルシウムの開缶から製品の缶詰め、ハンダ付けに到るまでやった。水素化カルシウムの用途は極秘で判らなかったが、潜水艦や海軍最後の特攻兵器、人間魚雷「回天」に関係があるらしかった。

三井では所員と同じ待遇という条件であったが、作業衣のこと、配給のこと、昼食のことなどで班長の太田善造君は所側との折衝に骨を折った。引き上げは6月頃かと思う。

三菱石油班〔川崎〕12名

研究所、臨時建設とイソオクタンの三つに分かれて配属された。潤滑油、南方油の脱蠟装置、終わり頃には松根油やアルコールなど代用燃料をやった。臨時建設には東大燃料の学生が3人来ていた。臨建はプラントの解体、土工といろんなことをやらされた。九州飛鳥の疎開先では地下工場にするため、多段の蒸溜塔を単段に改造して並べることを計画し、そのための原書など勉強させられた。また建設資材をもらうための申告書も大分書いた。

初めはクラッキング塔、蒸溜塔などの音が大変やかましかったが、そのうちに原油が無くなり静かになってしまった。我々も解体作業のほか仕事無く遊び時間が増えた。その頃仕事の無い者を四エチル鉛の添加工場に配転する話しがでたが、危険が大きいのので断わった。当時のオクタン価は77で、今では自動車も走らない。

まだ空襲が本格化していなかった頃、隣に高射砲陣地があったせいで一度やられたことがあった。そのときは砂地に油がしみこんでいて火のまわりが早かったが、積んであったドラムかんに火が入って、ふっとんだだけだった。たまには産業報国隊のビールの配給がありどんぶりで飲んだ。配給はよかった。代用燃料研究のためエチルアルコールを川越までとりに行ったことがある。一番信用できるというので学生が行かされたのだが、帰途多摩川の土手でそのアルコールを飲ん



だことを思い出す。

20年3月の大空襲で川崎も焼けてしまったが、工場地帯だけが残った。しかし仕事もなく、いつやられるかも知れず、4月頃早めに引き上げた。その後行ってみると工場は完全に廃墟になっていた。

旭硝子班〔鶴見〕14名

研究所（試作工場）3名と、工場の研究室に2名、あとは現場にと分かれて配属された。

研究所では海軍の陸上爆撃機「銀河」の窓ガラス製造を担当した。これは平板を窓の形に切断し、炉に入れ加熱、急冷して強化ガラスとする作業で、熟練者になった我々3名が、交替で徹夜した。熱く体力のいる仕事だったが、大切な飛行機のガラスと思ってがんばった。この仕事が一番お国のために役立ったのではなかろうか。仕事の合間に技師の指導を受けて、卒論用にガラスの着色の研究を行った。

工場の方は、アクリルニトリルの製造、メタクリル酸エステルポリマーの製造、磨き板ガラスの間にモノマーを入れパーオキサイドで重合させ防弾ガラスの製造などを行った。現場の作業とは別に工場の試験室で約10日間、卒論用にメタクリル酸エステルをつかってコポリマーの実験をさせてもらった。

研究所、現場ともしばしば徹夜作業があったが、待遇はよかった。

学内班 11名

残りの者が大学内に残り、科学研究要員として教授の戦時科学研究の助手をつとめ、市川、中原、工藤、横手、五来などの研究室に分かれ2号館や東大で、航空潤滑油の合成、セメントの研究などにたずさわった。昭和19年秋になると教室の実験助手たちも徴兵や動員



で消え、我々級友からも出征する者が出るようになり、上野駅などでの見送りは専ら学内班が引き受けた。やがて横手先生にも徴兵令状がきた。

20年春からは米B29爆撃機の空襲が日夜を分かたず激しさを加え、3月10日の空襲で2号館から見下ろす神田一带は焼失してしまった。幸い駿河台は免がれ、我々は研究を続けられたが、器具、試薬類はすこぶる入手難で、学外の研究機関から援助を受けることもあった。その頃になると空襲馴れというのか、敵機が頭上に来てそれを屋上から眺めて、明大横の高射砲陣地からの成果を期待しながら見つめていた。また実験の合間に地下の研究室に野菜などを持ち寄り、研究用に配給された植物油で天ぷらを揚げたり、アルコールを薄めてウイスキーまがいのものをつくったりのささやかな楽しみを味わった。

九段の憲兵隊本部より“敵の焼夷弾の分析”を依頼され、我々の手で構成成分を報告したこともあった。また大学の貴重な図書類の地方疎開に協力した者もあり、学徒動員先との連絡役も学内班の仕事であった。

動員に出た者は、行った先によって異なるが、たしか月60円から、人石などいいところでは学卒なみの85円を、毎月、あるいは引き上げ時まとめて貯金通帳で受け取った。動員は20年6月半頃に終わった。動員学徒の中には、空襲や事故の犠牲になった人も多かったが我々の仲間は全員無事で大学へ帰ってきた。ただ一二の年長者で徴兵猶予が切れ、動員先から出征した人もいた。また動員先で伴侶を見つけ、その後結婚にまで進んだのも数組ある。動員解除後は、空襲と暑さに悩まされつつ自宅や下宿で、卒論がわりの動員中のレポートをまとめ大学に提出した。



雪の日の2号館前 中原、皆川先生

3月9-10日の大空襲に始まる度々の空襲で東京は焼け野原、5月24-25日には皇居も焼かれたが駿河台は無事だった。8月にはいり、6日、B29が原子爆弾を広島に投下、8日ソ連参戦、9日長崎に原爆とあわただしくなった。広島で帰省中の阿部千秋君が犠牲になったことは残念である。

昭和20年8月15日正午、天皇陛下の放送で長かった戦争は終わった。正直に言って勝てるとは思わなかったけれど、一度に力が抜け、負けたこのあとどうなるのかと不安であった。しかし空襲も、灯火管制もない夜を迎えてほっとした。その後、情報を求めて登校したところ、わが2号館の上空に超低空で海軍の一式攻撃機が爆音を轟かせ、しきりにピラをまいていた。ピラには「われいまだ降伏せず、厚木航空隊」とあった。8月28日連合軍先遣部隊、厚木飛行場に到着。つづいて最高司令官マッカーサーが飛来したのは30日である。

当時就職は試験などなく、技術者を重点的に配分するため厚生省が割当を行い、その切符が8月半ばに各校へくることになっていた。陸軍技術候補生や海軍技術見習尉官に応募した者、海軍予備学生を目指している者、あるいは卒業後すぐに入営の通知を受けている者、いずれにしても待っているのは軍隊であった。

すべてが8月15日に消えてしまったのである。

学生時代を戦争と共に終えた我々は、9月無事卒業式を1号館5階大講堂で挙げ、就職のあてもなく、焼跡だらけの各地に散らばっていった。

【あとがき】本稿は、在京5回生による懇談会のテープと沢尻一郎君の原稿によりまとめ、二三の方に訂正していただき仕上げた。懇談会は昭和63年1月11日、理工学部588B室にて行ない、13名が出席したが、もろもろの思い出の（とくに年月日、人数など）不確かな事に改めて40余年の歳月を感じた。学内に残る資料を探して正確を期すべく、実行していない。誤りの文責はすべて筆者にある。（元、保土谷エンジニアリング常務取締役昭和20年卒）

変身物語

五 来 達

戦前のことだが、今の主婦の友会館が建つまえ、空地の一隅に工業化学科の定性、定量の分析実験室があった。時々私はそこへ学友の仲先生をたずねた。昭和17年の3月から私も専門部工科工業化学科の一員となった。二号館の扉を押してはいると、おそらく今でも左側に守衛室があるのだろう。右側には薬品と器具の配給室があった。二階中央の廊下を玄関上の方へ行くと右に中原先生の部屋があり時々そこに東大の永井先生が来られた。左側に専門部主任の黒柳先生の部屋があり、しばらく私はそこに居候をした。やがて黒柳先生は別の部屋に移られ、代って横手先生がはいつて来られたが、ある日しが栗頭であらわれ「応召です」といった。二階中央に廊下をはさんで教室が二つあった。八時すぎ教室の外に数人の学生がたたずんでいることがある。永井先生は一分でもおくれると教室へいれてくれないという。当時の教授会議では正面中央に円谷学監がひかえ右に建築の先生、左に学監の信任のきわめて篤い永井先生が坐り、入口近い末席に庶務課長の古田氏がいた。戦後円谷学監が公職追放（いわゆるパージ）になると古田課長は事務長になり、本部の理事に推薦されると、呉総長の信任をえてやがて理事長となり、ついに呉総長と衝突してこれを追い、名実ともに日大の大御所となったことは衆知のことと思う。

昭和17年、18年、戦況は次第に悪化していったが、7月には学生を三組みに分けて東北、北陸、関西の工場見学に行く余裕があった。しかし軍事教練はますますきびしくなり、進級、卒業の会議では配属将校が教練出席時間の不足を理由に成績優秀な学生でも進級、卒業に頑強に反対した。御殿場には数日宿泊して軍事教練を強行する設備があり私もそこへ慰問に行ったことがある。学生は目黒の海軍研究所で魚雷の燃料となる過酸化水素の製造を手伝わされたり、農家の手伝いに駆り出されたりして学業にいそむ時間が乏しくなる一方であった。昭和19年の6月、熊谷在の農家へ麦刈などの手伝いに行った時は私も数日滞在して学生の監督に当たった。学生には夕食に一合の酒が出た。困っ



たことに村の娘たちが次第に学生たちに引きつけられ村の男子青年たちが面白からぬ感情をもちはじめた。

さて古代ローマの詩人オビドゥスには有名な変身物語があり、現代ではドイツ作家カフカの傑作に「変身」という作品がある。終りに専門部工科の遂げた二度の変身について略記する。

昭和22年4月専門部工科の郡山移転が決定した。在校生はこれに反対、別に郡山で学生を募集することになり、その後三年間二つの専門部工科が併設されることになる。24年専門部は新制大学に昇格、変身する。一方駿河台の専門部も京成電鉄大久保駅近くに移転する。木造の兵舎跡である。これがやがて生産工学部に発展、変身し、自身は北習志野に転生する。私はこの候補地を移転前年の秋に見に行ったことがある。小松のまばらに生えている荒地で、北風が土砂をまきあげていた。まもなくそこに四階建の校舎が櫛比することになる。専門部は短大となった。北習志野には新たな学科が誕生併設された。つぎの変身はいつか。

日大工化初期の10年の思い出

横手正夫

昭和14年の夏のことであった。中原万次郎先生が私の所に訪ねて来られた。東大工学部応用化学科の事務員、渡辺さんの紹介状を持って来られた。中原先生は私の十二年先輩にあたるけれども、一面識もなかったのでそんな紹介状を必要としたのかも知れない。渡辺さんは碁が初段で、私は在学中、学生の中で一番碁が強かったので熟知の間柄であった。といっても同級生は29名に過ぎなかったし、その上、近年友人たちの話を聞くと、その後上達したと見えて、有段者が四段を頭に少なくとも3名いるらしく、今では四番目以下の実力のようで、これは当時の昔話に過ぎない。多分、中原先生は東大応用化学科の事務室に行かれて、卒業生で遊んでいる男はいないかと調べられたのであろう。私は昭和10年4月から三菱化成(当時は日本化成)に勤めたが、昭和14年3月に若気のいたりということでやめていたのであった。

中原先生は私に日大、工化で教えないかと誘われた。結局、私は昭和14年9月から工業化学科で講義をすることになった。この事についてはそれに先立つこと約6、7年前、私が学生の頃友人と夜、本郷通りを散歩して運動具店のミマツの前の手相見の小父さんに見て貰ったことが関係していると思うのである。彼は私の手相を見て「あなたは将来、人を教える仕事をする。多くの人に尊敬されるようになる。二度結婚する。」と言った。私は念のため、1年程たってまたその小父さんにもう一度、手相を見て貰ったのである。小父さんは又、同じことを言った。そんなこともあったので、つい私も中原先生のおすすめにのったのかも知れない。手相見の小父さんの予言の最初の所は当たったわけであるが、そのあとの所は全部はずれたから、すべては意味のないことかも知れない。それからの約40年近く日大の工業化学に籍をおくようになり、昭和53年に定年退職し、その後も昨年まで非常勤講師として9年間、講義をしたので約50年近く日大工化にお世話になったことになる。

この度、日大工化の50周年の催しが行われることになったが、私の日大工化とのかかわりも50年近いわけ

である。古いことを知っているであろうということで原稿を求められたが、日大工業化学科の歴史的記述は別に順序だててくわしく整理されて掲載されることと思うし、古いことでの私の知見はこの催しの委員の方々に申し上げたので、私は私のまわりに起ったことを2、3述べることに止めたい。

昭和14年の9月、最初の講義は専門部1回生に行ったことになる。工藤先生に紹介されて生れて初めて教壇に立って、すっかり上っていたようである。後の方の学生が、「聞えません」と言ったので気が落ちついて何とか無事に終ることが出来た。夜は高等工学校の1回生に講義をした。

当時、私は27才、学生とは兄貴分、友達のようなものであった。講義は化学工学であった。私自身の専門は大学では石炭系の大島教授の講座で、牧助教授の所で染料合成の卒業研究をし、卒業して入った三菱化成ではアントラキノン建築染料の仕事に四年間、従事した。日大工化では保土谷化学の青山敏貞さんが合成化学の外来講師として来られて居り、同門の一年先輩であるので、私は教える人のいない化学工学を受持つことになったのである。化学工学は当時、新しく大きく取上げられた学科であり、また私は三菱化成をやめて遊んでいる間に知人の化学機械の会社を手つだっていた事情からも化学工学を引受けたのであった。

当時の日大工化の教授陣は黒柳先生、中原先生、工藤先生、仲先生といったところで、私より後に西川先生、西川先生が東工大に移られて代って市川良正先生、五来先生、最後に第二次大戦の終る前に長井先生といった順になると思う。永井彰一郎先生は東大教授で兼任であり、科長であった。

化学工学の講義は私自身があまり良く知らないので最初は講義が学生に良くわかったようである。次第に私の化学工学の勉強が進むにつれ講義の内容が難しくなると学生にわかりにくくなったような気がした。それでは具合が悪いと思ってほどほどの所で10年か20年、同じような講義にしてしまっ、何だか今考えると悪かったかなと思う次第である。

当時、私はまだ独身で、麻布の我善坊町という飯倉のあたりのアパートに住んでいた。独身の気楽さから、ある冬の2月頃、一杯のんで夜の12時近くフラフラとアパートの前に帰って来た。その時近くの暗闇から「先生」と声をかけられてびっくりしたものである。その人はI君という学部一回生で、3年で卒業の前のことであった。彼は私の点が足りないので卒業出来ない、何とかお願いします、というのであった。それは気の毒だ、何も君を落第させたい訳ではない。何とかしましょう、ということで話は終わった。あとになって同クラスの私の部屋の卒論生（東田政治君、後に日産化学、副社長となった。故人）に聞いたら、あの人は他の先生にも同じことを言っているようですよ、と言った。それはともかく、I君は大東亜戦争に召集され護国の鬼となられたようで、こんな立派な人を一時でも冬の夜に苦勞させたことは全く申し訳ないと思うのである。

その頃、学生に言わせると友田先生の点が一番甘く、その次が私だということであった。また、学生時代に成績が悪くて苦勞した先生ほど点が辛い、学生時代の仇討をしているのだ、と言う学生もいたが、いずれにしても私にうんと甘い点をつけさせようという作戦の一端と思われる。ともかく、私は宮沢賢治さんではないが、東に卒業したいという学生があれば何とか応援してやりたいと思ひ、西に就職したいという男がいれば何とか就職口をさがしてやり、南に結婚したいという卒業生がいれば相手をさがしてやろうと思ひ、といったような教師生活を送ったような気がする。

学部、専門部、二回生、三回生あたり、一番記憶に残る学生が多いように思うが、これは学部で言えば五、六、七、八回生あたりは戦争にかかって学徒動員で学校にあまり来なかったり、その後は一クラスの人数がふえて、私の研究室所属の学生の範囲に主として思ひ出が多いせいであろう。

その専門部二回生を引率して日立鉱山の見学旅行に行ったことがある。日立の旅館に一泊したまでは良かったが、翌朝ある学生が「昨日、待合に行って学生証がなくなった。どうしましょう。」というのである。27,8才の私には困った問題であった。もう一辺行ってよくさがして来い、という程度のことでその場をすませたが、そのあと無事にすんだところを見るとどこかで見つけたのかも知れない。

学部二回生とは妙高、池の平へ秋に旅行したことがある。学生の見学旅行はこのあと、戦争でそれどころではなくなり、研究室の旅行も昭和25年に学部十一回

生（生産の芝宮教授の組）の時に塩原へ行ったのが戦後の最初であった。学生8名と私とで塩原に行き、今晚泊めてくれませんか、と一軒の宿に入った。中会津屋という宿だったと思う。予約もせずにそんなことが出来たのは現今と隔世の感があるが、多分、米を持参したことと思うし、温泉が熱くて、うめる水もなく、入っては飛出しをくり返した情けない風呂であった。その後も三、四年は研究室の旅行もなかったように思う。

私はその机と椅子があるだけで研究室もなかったが、昭和17年頃からホルトール法の研究にかかわった。ホルトール法というのは植物油に、水素あるいは窒素気流中で三千乃至五千ボルト、五百サイクルの高電圧、高周波の電気をかけて潤滑油にする方法である。第一次大戦中にドイツで試みられた方法であり、日本も石油資源に乏しく、第二次大戦となって潤滑油が欠乏して来て、これに目を向けざるを得なくなったのである。電極板と絶縁体の板とを交互に多数並べて、その間に薄光放電を行わせ、植物油を流下し分解、水添、重合させて粘度を高め粘度指数の良い潤滑油を得るのである。私と北海道大学の岡本剛教授が研究にあたり、会合を重ね、私の知人の会社で装置の設計をした。東工大の滝沢先生がある事件で学校をやめたこともあり、ホルトール法の会社、帝国潤滑油株式会社の社長となった。滝沢さんのあとに東工大へは一時、日大工化にいられた西川先生が行かれたことになる。

昭和20年3月10日、桐生の帝国潤滑油の工場で、プラントの試運転が行われた。桐生の宿屋に泊ったがシラミが沢山ついて困ったことを思い出す。その夜、東京の方角の空が真赤になった。3月10日の東京大空襲であった。それから間もなく、発電機関係の設備を発註していた日立の工場が艦砲射撃を受けて潰滅し、その段階でホルトール法の夢は消えてしまった。その時、私は自宅の疎開の荷物を運んで長野県の小諸の近くの村にいたが、日立から100キロ以上も離れていると思われるその土地でも地ひびきがして、砲撃の威力は大したものであった。

話を昭和16年に戻すと、その年の12月8日、私は朝下宿を出て学校へ行こうとして飯倉1丁目から市電で日比谷に行き乗りかえた。号外が出ていたし、日比谷交叉点で新聞を買って見ると、日米開戦のことが大きく出ている。これは大変なことになったな、どうなることであろう、と驚き心配したものである。市電をのり換えて学校へ着くと、その日、最初に現れた教師ら

しく、二号館の入口で学生に取り囲まれた。「先生、どうしたら良いでしょう。」と口々に問いかける。学部二回生あたりが多かったのではなからうか。「今まで通りに、落ちついて勉強することだな。」と言うのが私としてのせい一杯のことであった。あの学生の中には戦死した人も何人かいるだろうと思うと心が痛むのである。

時局が切迫するにつれ、食事も困るようになった。朝、何にも食べないで、月曜の8時から10時、10時から12時の学部と専門部の講義を続けて行なうのは楽ではなかった。朝起きて朝8時の講義まで時間がないので、朝食がとれなかったせいもあるが、次第に飯屋の数がへり、配給券をもって行く必要もあり、すぐ売切れることになることでもあった。当時、朝食は15銭が相場で、松住町の公営食堂（お茶の水から秋葉原に行く中央線緩行線の橋の下、川の横にあり、現在は高層の都営住宅になっている。）でわりに遅くまで朝食が食べられ、13銭で少し安かったが、ある日、そのハエだらけの食堂で客は二人きりで、隣のその男を見ると乞食であった。これはたまらぬ、年貢の納め時だと覚って昭和17年に独身生活を中止して結婚した次第である。

外食の昼食は、魚のスプタなどは御馳走の方であり、あの食堂の調理場にはネコの頭がころがっているぞ、といった流言が流れたり、蛙やザリガニあたりも知らずに食べたことであろう。夜学があるので夜食が必要となるが、お茶の水から駿河台に向かって右側、明治の手前に洋食屋があって、海宝メンというのを食べたことがあるが何とも言えぬ不味さと臭気に吐き気を催したことがある。

戦争が激しくなり、専門部工化の学生を疎開させようかという話があり、岩手県平泉のあたりで加藤君という学生の父親がやっている松根油工場に学生をつれて行って、しばらく滞在したことがある。松根油というのはガソリンの代用に松の根を掘り出して乾留して得るテレピン油の類である。力士が松根の掘り出しに動員されたのもこの頃の話である。平泉では中尊寺を拝観し、和尚さんの説明を受けたがひどいズーズー弁で全然訳がわからなかったことを覚えている。あのあたり、その頃は本当に田舎であった。

私は昭和20年の7月に召集された。その前に、召集の練習といったようなものが、その当時住んでいた返子の桜山小学校であったことがある。私は司令官に、「私は航空機用の潤滑油の研究をしている。兵士として召集したって役に立たないから除外してくれ。」と

交渉したところ、「潤滑油など小便でもつめれば良い。」と言われ、これでは仕方がないとあきらめていた。教室へ行って召集のことを学生に話したところ、学徒動員などで何人もいなかったがせん別だといって若干の金を集めて持って来た。私は生きてかえるつもりであったので、いらないと断って受取らなかったが、今考えると貰っておいた方が良かったかなと思うのである。集めた金を元の何人かの男に正確に返すのは厄介だったろうな、とつまらぬことを考えるからである。学校の本館の事務へ行って召集されたことを届けたが、丁度、後に理事長になった古田重二良さんが事務長か何かでいて、「それは手ばかりだったなあ」と言ったことを思い出す。そんなことを言ったところで、学校で召集免除の手つづきをしてくれる訳もないし、と思ったものである。

私は大岩君という専門部工化中退の男をホルトール法研究の私設助手としていた。善良な人物であったが、私が召集されて行く時に学校の薬品の戸棚でアルコールと研究材料の植物油など大切なものを説明しておいたが、終戦後、帰って見るとすっかりなくなっていた。飲んで食べてなくなったということで、当時は食べ物に不自由をした時代であった。召集された場所は福岡で、兵営は空襲で焼け（今の平和台）郊外の花畑小学校や油山の竹でつくった小屋などに雑居した。8月15日の敗戦となり最後には9月の秋季皇霊祭（今の秋分の日）の日に友人と脱走した。越中フンドシを袋に縫い農家でサツマイモをわけて貰ってこれを入れて肩にかけ東へ東へと逃亡したのであった。山陽線は台風で一ヶ月以上不通であった。軍隊生活のことは学校と関係がないので、これくらいですべて省略することにしよう。

私が東京へ帰ったのは10月になってのことで、二号館に先ず顔を出した。入口のところで仲先生に出会った。先生は永井彰一郎先生に毎日、学校に出勤するように言われたが、川越に住んでいるので毎日はいれません、と言って学校をやめたところだと言われた。それ以来43年、仲先生にはお目にかかっていない。私の方は、永井先生に「君は兵隊に行ったから教職追放だ。」と言われたが、二等兵で召集されて行っただけだからそんな事はあるまいと高をくくって今日にいたった次第である。

私が日大に勤めて貰っていた月給は150円であった。戦争中、次第にインフレになって、夜の高等工学校の学生が昼間、仕事をして貰う給料の方がこれより

高かったようだ。それでも、私には別に収入もあり、金銭的に不自由はなかった。しかし、敗戦後は別収入もなくなり、日大の月給 150円はそのまま、インフレは益々盛大になり、すっかり困ったことになった。日大、理工学部の先生方も大部分はそれから数年間に顔ぶれが変わったようである。私は友人や知人の関係で、理科大（当時は物理学校）、芝浦工大（当時は専門部だけ）、工学院大学とこまめに非常勤務師をして稼いだ。といっても今も昔も非常勤務師というものは薄給であって、2円や3円宛稼いでも何の足しにもならない。これでは駄目だと悟って昭和23年から染料の研究に没頭するようになった。といっても助手はいないし、研究費はなし、研究室だけやと二号館の地下に設けて、旧制学部九回生からの卒論生を相手に研究を進めたのであった。薬品、器具など会社に無心して貰ったものも多かった。研究は少量で行ない、最終段階では試料1グラム以下でやることも多かった。恵まれない不利の立場にいたからテーマは他人のやらないような、役に立たないようなものを選んだつもりである。昭和23年以後の私の研究のことは、工化誌、有機合成化学協会誌に発表した報文で判断していただきたい。私の研究に協力して貰った多数の卒論生の方々、その他、お世話になった卒業生の方々に、この稿を通じて深く感謝する次第である。昭和23年から昭和53年に日大を定年退職する迄、たゞ研究だけを目的に生活したようである。

以上、私の50年に及ぶ日大とのかかわりの中で最初の10年、昭和14年から23年の間の思い出を記して見た。

最後に、昭和23年頃の貧乏の思い出の一つ記して見たい。研究室で朝から夕方まで研究に熱中していると、夕方になると息ぬきをしたくなるようである。同寮のN先生に「お茶でも飲みに行きませんか。」と声をかける。「行きましょう。」ということで、錦華公園と明大の間の道を神保町の方へ下って行く。「一寸待っていてくれませんか」とN先生は越後屋という質屋に入った。腕時計を外したようだ。お茶をのんでワリカンで支払いをして神保町の角へ出た。また「一寸待っていてくれませんか。」ということで、彼は宝クジ売りの小母さんから一枚買うではないか。なる程と感心したものである。N先生は私に「男は時々、豪遊をしなければ人間が駄目になる。」と教えてくれた。私ももっともだと思ったような気がする。しかし、現在にいたる迄、二人ともケチな遊びばかりして来たようで、すっかり駄目な人間になって今日を迎えたようだ。戦中、戦後は全く大変な世の中で、昭和30年頃から現在に近い姿になったような気がする。

また、当時は工業化学科に電話が二本しかなくて、一本は中原先生、もう一つは黒柳先生の部屋にあった。黒柳先生の二階から、助手の南山君、内藤君が地下の私のところへ一日に何度も「先生電話ですよ。」とかけ下りて知らせてくれる。私は「それっ」というところで階段を二階にかけ上ったものである。日大にはスポーツやリクリエーションの施設は何もなかったけれども、この毎日の運動で脚を鍛えることが出来たらしく、今日も変りなく元気でいられることを天の配慮と感謝してこの稿を終りたいと思う。



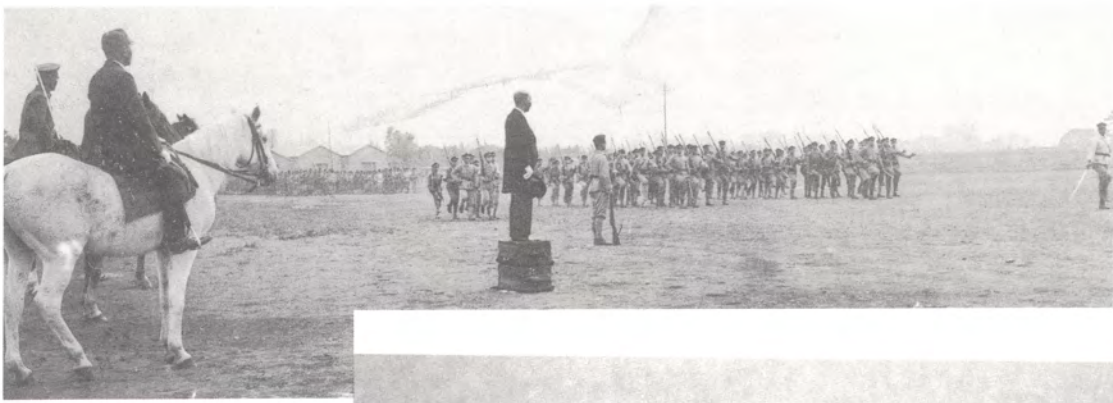
専工2期生アルバムより



専工2期生の卒業記念パーティ 昭和16年11月29日 帝国ホテルにおいて

確かな記憶はないが、2学期が始まって間もなくの頃、昭和17年3月が繰り上がって12月卒業になるといわれてびっくり。毎週のように教練が代々木の練兵場で行なわれており、その頃学生の頭は丸刈にされていた時代であったが、繰上卒業といわれて何だかあわたしく思った事だけが記憶に残っている。

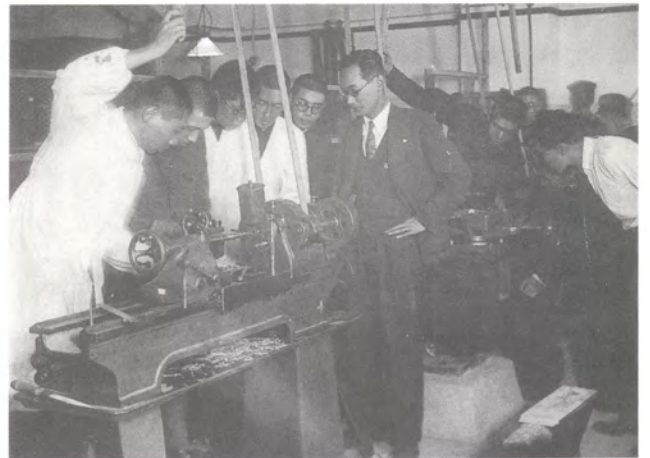
卒業実験や就職とあわたしくすぎて卒業式をむかえ謝恩パーティとなった。パーティの後約1週間後に大東亜戦争(第二次大戦)が始まった。その時になってやっとなる程繰上卒業も何となく理解出来たことである。



「査 閲」 昭和16年10月20日 代々木原において



「告示」や掲示をお読み下さい。
当時の時代の一端を示しています。



2号館地下工作室 横手先生



昭和16年頃の平秤室



卒業アルバムをつくるために数グループで、
記念に残る所で写真を撮ろうということに
なった。左上はニコライ堂を背景に、右下
は聖橋のそばでうつしたものである。

(昭和16年)



浅野セメント多摩工場見学

クラス全員でよく工場見学に行った。浅野セメントの工場で、後方にセメント
製造時のキルンがある。現在と違って昔のはかなり小さかった。(昭和15年)



昭和16年 喫茶店で

講義をサボッタか、休講かは兎に角として、いわゆる喫茶店によく出かけた
ものである。ちなみに当時のコーヒー代は10~15銭と記憶している。

50周年を迎えて

出席者

長田 博(専工昭和16年卒)
亀ヶ森 進(専工昭和17年卒)
(司会) 南山 斉(専工昭和23年卒)

学生時代をふり返れば

南山 お二人の卒業年といえますと

長田 私は昭和13年入学で16年卒業です。

亀ヶ森 私は本当は昭和18年卒業の筈なのですが、戦時で短縮されて17年卒業でした。

南山 長田さんが卒業した年に日米開戦ですね。当時の就職状況はどうかでしたか。

長田 その年に内閣の企画院に入りました。後に通産省と合併して軍需省になりましたが……。

南山 官吏ですね。入り難かったのではないですか。

長田 いやあ、すーっと楽に入れたものでした。

亀ヶ森 私は昭和15年入学で、在学中日米開戦で。

南山 教練などでしぼられたのでしょうか。

長田 そうなんだ。代々木練兵場へ三八銃をかついで省線(JR)に乗ってね。野外教練では富士山麓の駒門に行きましたよ。にらまれると怖いので、教練は一生懸命やりましたよ。

南山 軍隊には行かれたのですか。

長田 行きましたよ。肉薄対戦車攻撃なんかやられたから、これじゃ日本は負けだと思いましたよ。勝てるわけがない。

亀ヶ森 私は肺結核ということで3日間で帰されましたが、実は員数外だったようで、命拾いました訳です。

南山 まったく悲惨な戦争でした。戦争中は2号館(工化)の隣の中村さんの邸(現在の8号館の場所)にB29を狙った高射砲の不発弾が落ちてきましたね。びっくり。工業化学の前の明大のあるところは当時原っぱで高射機関銃陣地になっていました。警報が発令されると九段の連隊から兵隊さんが飛んできて詰めていたりしていましたね。

亀ヶ森 終戦になってサイパン島で戦死していたことになっていた筈の1回生の黒川さん(クラブ糊

社長)がひょっこり帰ってきて……。すでに靖国神社に祭られ国から金一封で待っていたそうで。

南山 (驚いて)それは初耳ですね。

亀ヶ森 在学中勉強しなかったもので、就職してから弱りました。会社でテーマを与えられて、あわてて横手先生のところに飛んで行って教えをうけたものです。先生のいわれた通りにやると、これが旨くいくのですね。(笑) 毎日のように先生のところに通ったりして。卒業してからよく勉強しました。

長田 私は食塩電解の現場にいて、苦勞しながらいろいろ研究データを出しましたが。しかし現場で学校を出ていないような人が、私が苦勞したのとかかわらないデータをどんどん出すのですよ。あれには参りましたよ。

亀ヶ森 当時の古い職工さんは大変よい技術を持っていましたからね。外国と違って、日本の大学は理系より工学系が多いでしょう。発明は少いけれど製造技術は秀れていますね。工業的に品物をつくる教育ということで、「工業化学科」という名称をつけたことは、今考えると適当だったという感じを強くもちますよ。永井先生が「応用化学」ではなく、「工業化学」だとよくいわれましたが、先生は先見の明があったと思いますし、今日の日本の繁栄を築くもともになったと思います。

南山 終戦後は、働くところがないし、食うのに困って皆弱りましたね。いまの若い人には到底理解出来ない社会状況でしたからね。

長田 そうそう。誰もがすっかり予定を狂はしてしまっただけ。

亀ヶ森 その頃、大学では研究室を解放して卒業生の便宜をはかってくれたので、あれは助かりましたね。

南山 戦災で工場は潰滅し、生産は完全にストップ、ものはなにもないし。生きていくためには食はねばならないし、食うためには、そこで若き化学者たちの生きるためのギリギリの活躍が始まったという訳ですね。

亀ヶ森 原料は払底しているし設備はない。手っ取り早く作れるものとなると、アミノ酸醤油とか、ポマード、合成ウイスキー、石けん、砂糖なんかない時代ですから甘味のサッカリン、ズルチン。大手工場が乗り出して来るまでは、化学に

覚えのある人たちの独壇場でした。

南 山 亀ヶ森さんはいま化粧品の製造販売を手広くやっておられますが、やはり、いろいろ経験された方ですか。

亀ヶ森 ええ、手掛けましたね。酒の樽の木香をアルコールに移す研究なんかもしましたが、扱うものによって当時の統制違反すれすれになるような問題もありました。その頃は「生きていることが、つまり闇の証明ではないか」といわれた時代ですから。

南 山 そうそうY判事とおっしゃいましたか、ヤミ行者を排除し配給物資だけで生活し続けたため、栄養失調で亡くなり、大きな話題になったことがありました。

長 田 甘いものも辛いものもないときで、合成酒、合成ウイスキーなんかお手のもの、化学屋はよくアルコールを飲みました。(笑)

亀ヶ森 そんな身を捨てて取っ組んだ時代から世の中も次第に落ちついてきて、サッカリン作っていた人たちがコールドパーマ薬品関係へ移行するとか。いまをときめく中堅企業の主も、終戦後の混乱時代には物置の隅でバケツに何か入れて搔回していたという御仁が多いのですよ。日大出身者だけでなしに。

その頃の教育は大変きびしかった

南 山 勉強した知識が敗戦後の困難期にものをいっただといえますが、当時の教育はどんなだったですか。

亀ヶ森 入学したとき120名位、1年から2年に上るときに60名位に。さらに卒業時には50名を切る位まで減りましたよ。

長 田 「何科でもいいから入ればよい」と安易に考えて入学した人たちは、2年に上るときに大体落とされていましたね。

亀ヶ森 新しく出来た科でしたが、教授陣が東大出身ということもあって入学はかなりむずかしかったのでは。

長 田 4年間在学しても顔も名前も覚えきれないという今とは全然違うでしょう。

南 山 併設されていた夜間の「高等工学校」に札付きの(?)真面目学生がいますね。研究室の先生方を質問して尋ね回るのですよ。夜の9時、10時になってもねばって帰ってくれないし、工



長 田 氏

亀ヶ森 氏

南 山 氏

藤先生なんか往生していましたね。工場見学なんかもよくやったのではないですか。なにしろ飲ましてくれたり、お土産付だったりしましたから。(笑)

これからの学生に望むこと

長 田 勉強しない方だったから、あまり大きなことは言えないけど。(笑)

亀ヶ森 団体生活に伍していける人であってほしい。

長 田 そうそう。それがないと全然駄目だね。

亀ヶ森 部活動なんかをよくやった人は、そういう点では比較的よいのではないですか。

南 山 現在の理工学部には昔のような工化の中での研究会だとかいった学生の部活動がないと聞きましたが。意欲が気力を起こさせ、勉強のし方、遊びのし方にしあって、グループで切磋琢磨、わいわいやっているうちに培われていくものだと思うんですがね。

亀ヶ森 学生時代の自治活動の経験は社会にでて大変役に立ちますよ。

南 山 そういえば、1回生の東田さんが(故人・日産化学副社長)まだ課長くらいの時に、「労組の委員長も引き受けるような人でないと将来大成しないよ」といわれたのを覚えています。

亀ヶ森 トップに立つ人は人間的な魅力がありますね。

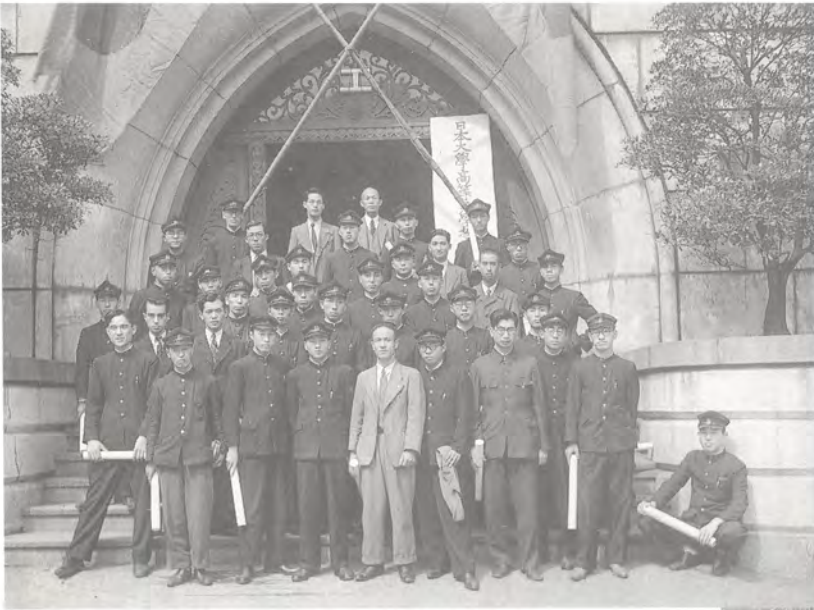
長 田 学業も大切だけど、人間的に魅力のある学生を育て世の中に送りだして欲しいと大学当局に望みたいです。

南 山 初期と違って今は先生方の殆どが母校出身の先輩方なんですから、後輩の教育をしっかりとお願いしたいと。

長田・亀ヶ森 まったくその通りです。

(62.12.19 2号館会議室編集上野敦行)

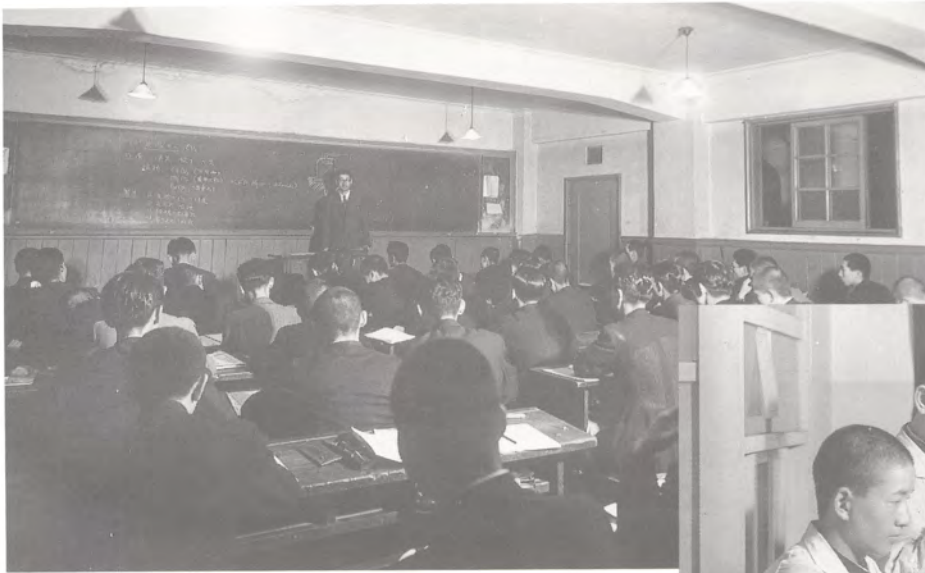
高工三期生 のアルバムより



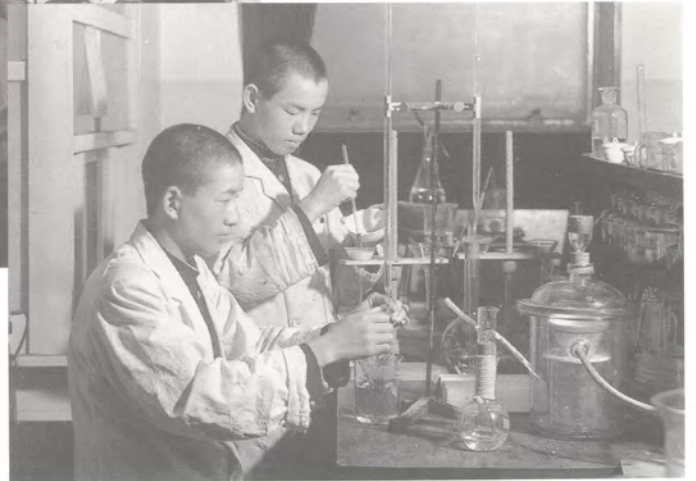
卒業式後、本館前で（昭和17年9月）

甲府昇仙峡に旅行





合成実験（卒論の実験）



卒業当時の寄せ書きをみて、往時を忍び感慨無量なものがある。私たちのクラスは入学当時60名余であった。学生は昼間、官・公・会社に永年席をおく技術者が約10数名、工場自営者約数名、及び旧制中学を卒業したばかりの人たちで年齢の違いはあったが向学心は極めて旺盛であった。大東亜戦争のときで戦いが熾烈になるにつれ応召したり、また、占領地産業の復興に技術者は派遣されたりして、高工を無事卒業できたのは40名位であったと記憶している。

こんな、混沌とした時代にも青春の血は燃えていた。クラス全員、あるいはグループにわかれてのディスカッション、工学祭への積極的参加、旅行、一杯のんでの気焰をあげたことは今も昔も変わらない。授業時間の不足、特にドイツ語、数学は学外での夏季講習会で補った。終戦後、暫くして平穏を取り戻したころ新聞で級友が学位をもらったことを知ったり、会社幹部の移動欄に級友に名を見つけたりした。電話や懇談の機会をつくり、喜びを分かち合ったものである。工業化学科創立50周年記念事業の機会に仲間たちの消息の変化を知り、50年の年月がいかに長いかをしみじみとかんじた。私自身は50年の間の技術者生活を回顧して他の大学出身者と比肩して同じ職域で遅れをとった記憶はない。これは母校のお蔭と感謝すると共に日本大学を卒業したことを誇りとしてきた。

(田所俊男)

